

キャリアデザインの視点を取り入れた授業活動

—「日本語演習Ⅱ」の実践報告—

柳田 直美

要 旨

本稿は2008年度3学期、2009年度1学期に学類留学生を対象として行った「日本語演習Ⅱ」の実践報告である。大学・大学院生対象の日本語クラスにおいて、自分の専門について発表する活動は、アカデミック・スキル向上をねらいとして多く取り入れられているが、大学に入学したばかりで専門知識が十分でない学生には難しい点もある。また、異分野の学生に自分の専攻分野について説明する場合には、内容や表現、語彙面の充実だけでなく、他者（聞き手）を意識した「わかりやすさ」が求められる。そこで本授業では、キャリアデザインの視点を取り入れ、学生の「学ぶこと」に対する自己認識と将来設計を意識した活動を行うとともに、他者（聞き手）を意識したアカデミック・コミュニケーション・スキル向上を目指した活動を行った。この授業を通して、学生は、自分の専攻分野に対する理解を深めただけでなく、他分野への興味も持つようになり、自己認識、自己拡大が図れた。また、学生がプレゼンテーションの際に他者を意識するようになったことが明らかになった。

【キーワード】 キャリアデザイン、アカデミック・コミュニケーション・スキル、口頭発表、自己認識と将来設計、他者への意識

Class Activity took in the Viewpoint of the Carrier Design : a report on Seminar in Japanese Studies II

YANAGIDA, Naomi

【Abstract】 This is a report on the class for undergraduate international students, held in the third term of 2008 and the first term of 2009. It is difficult for the student who just entered university and expertise is not enough to present his/her major. In additional, it is necessary to consider others when students explain about his/her major to the students in different fields. Therefore, two purposes of the class were set. First is to make students deepen the self-awareness toward “learning” and consider designing in the future through the aspect of career design. Second is to improve the academic communications skills to consider others. Through this class, students deepened understanding to his/her major field and had interest in other fields. In addition, students came to make considerations for their listeners in their presentation.

【Keywords】 career design, academic communications skills, oral presentation, self-awareness and designing in the future, considering others

1. はじめに

大学・大学院生対象の日本語クラスにおいて、自分の専攻する分野について口頭発表を行う活動は、アカデミック・スキル向上をねらいとして多く取り入れられている。自分の専攻する分野について発表することは、研究を目的としている学生にとってはかなり実践的な活動であるといえるが、自分の考えたことを他とインターアクションしたり、伝えたりする「コミュニケーション・スキル」を、学術研究も行える「アカデミック・コミュニケーション・スキル」とするためには、それぞれの分野の専門知識や専門日本語が不可欠である（柳田2009）。

しかし、大学に入学したばかりの学生に、専門知識や専門日本語が十分備わっているとは考えにくい。そのような学生に専門について発表させても、表面的な発表で終わってしまい、深い内容の発表をすることは難しいのではないだろうか。また、大学に入学したばかりの学生にとって自分の専攻分野についての発表が難しいのは、自分の専攻分野に関する知識がないばかりでなく、自分がこの4年間で何を学びたいかがわからない、または決めかねているということも影響していると思われる。この問題を解決するためには、学生自身の「学ぶこと」に対する自己認識と将来設計の視点が必要なのではないだろうか。

一方、プレゼンテーションでは、内容・表現・語彙面の充実はもちろん、他者（聞き手）を意識した「わかりやすさ」も重要な要素となる。しかし、学習者は往々にして自分が調べてきたことを一方的に話す傾向が見られる。

そこで本稿では、自己を認識し将来を考える「キャリアデザイン」の視点と、他者を意識した「アカデミック・コミュニケーション・スキル」を有機的に統合し、相互の向上を目指した学類1、2年生対象の日本語科目「日本語演習Ⅱ」の実践報告を行う。

2. 「日本語演習Ⅱ」の概要

筑波大学では、日本語日本事情科目として外国人留学生および帰国学生対象（学類1、2年次）に年間計13科目開講している。日本語日本事情科目はシラバスにおいて、「全体的な学習効果を高めるとともに、履修上の負担の軽減を図ることを目的に設けられている科目」と位置づけられている。「日本語演習Ⅱ」は日本語科目5科目の一つで、75分授業10週で1～3学期開講している。

筆者は2008年度から「日本語演習Ⅱ」を担当し、いくつかの活動を行っている。2008年度1学期は、審査員を意識し、論理的に意見を述べる「討論会」、2学期は自らの興味関心を明らかにし、聴衆に訴える「調査発表」、3学期と2009年度1学期は、他分野の学生を意識して自分の専門をわかりやすく発表する「個人発表：私の専門」を行った。

本稿では2008年度3学期と2009年度1学期に行った「個人発表：私の専門」について報告する。

3. 先行研究と本授業の位置づけ

3.1 キャリアデザイン

キャリアには、狭義のキャリアと広義のキャリアがある。狭義のキャリアは、職業の経歴を表すが、広義では、個人の職業生活だけでなく人生や生き方を表すとされ、河崎(2001)は、キャリアを「生活ないし人生(life)全体を基盤として繰り広げられる個人の役割や行為の連続体」と定義している。

この広義の「キャリア」をどうデザインするか。「キャリアデザイン」と呼ばれる将来を見据えたライフスタイル設計は、個人の枠を超え、現在、国として活発に取り組みが行われている。『児童生徒の職業観・勤労観をはぐくむ教育の推進について(調査研究報告書)』(国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002)では、キャリア教育において培うべき能力として「人間関係形成能力」、「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」という4つの領域、8つの能力を挙げている。「人間関係形成能力」は、「他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとにとりくむ」ためのもの、「情報活用能力」は、「学ぶこと・働くことの意義や役割およびその多様性を理解し、幅広く情報を活用して、自己の進路や行き方の選択に生かす」ためのもの、「将来設計能力」は、「夢や希望を持って将来の生き方や生活を考え、社会の現実を踏まえながら、前向きに自己の将来を設計する」ためのもの、「意思決定能力」は、「自らの意志と責任でよりよい選択・決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する」ためのものである。

また、大学においては主に就職支援を目的として、キャリアデザイン学科などを設置し、キャリアデザインに重点を置いたカリキュラムを構成する教育機関が増えている。さらに、留学生の就職を見据えたキャリアデザインに関しても研究が進められている(金原・春原2007)。

このように、将来を見据えて現在の自己を認識するキャリアデザインの視点は、大学に入学したばかりの学生が、「学ぶこと」において自己を認識し、将来について考えることにも活かせるのではないだろうか。

3.2 アカデミック・コミュニケーション・スキル

大学・大学院生を対象とした口頭発表のスキルについて、教室内の指導では主に、形式面に注目が置かれてきた(倉八1995、熊波1997など)。熊波(1997)は、発表する内容の重要性も認識した上で、非母語話者の口頭発表の指導の際には、表現面の指導が不可欠であると指摘している。

また、専門について発表するためには、専門に関する語彙の知識も必要である。専門用語に関しては、専門日本語教育における語彙指導の重要性が指摘され(村岡2008)、各分

野の用語集なども作成されている。

もちろん内容面、表現面、語彙面の充実が必要なことはいうまでもないが、それさえあればプレゼンテーションやディスカッションは成功するのだろうか。

大塚 (2009) は、科学技術について科学者と市民が話し合うサイエンスカフェやコンセンサス会議などの科学技術コミュニケーション、裁判員制度での裁判員と裁判官による評議コミュニケーションなど、変化しつつある日本社会の現状に触れ、市民と専門家の間の双方向型のコミュニケーションを実践する能力の必要性、つまり、他者を意識したわかりやすいコミュニケーションが重要であることを指摘している。

特に異分野の人たちを前に自分の専門について発表するような場合には、自分の専攻分野の人を対象にした発表に比べ、内容面、表現面、語彙面の全ての要素において、他者(聞き手)を意識したわかりやすいものである必要がある。柳田 (2009) は、「アカデミック・コミュニケーション・スキル」には、プレゼンテーションスキル、相互交渉スキル、専門知識・専門日本語の3つが含まれるとしているが、この3つの要素すべてにおいて常に「他者(聞き手)を意識する」ことが、アカデミック・コミュニケーションを成功させる上で重要となってくるのではないだろうか。

3.3 本授業の位置づけ

以上を踏まえ、本授業は次のような位置づけを持つ。

- (1) キャリアデザインの視点を取り入れ、学生の「学ぶこと」に対する自己認識、将来設計を意識した活動を盛り込む
- (2) 他者を意識した「アカデミック・コミュニケーション・スキル」の向上を目指す
- (3) (1)と(2)相互を有機的に結びつける取り組みを行う

次節では、本授業の実際の取り組みについて報告し、考察する。

4. 実践および考察

4.1 本授業の目標

本授業では、「キャリアデザイン」の視点を取り入れて「アカデミック・コミュニケーション・スキル」向上を目指し、次の2つの目標を設定した。

(1) キャリアデザインの視点

「自分の専攻分野と他者の専攻分野との関係・位置づけ」、「自分の専攻分野と社会との関係」、「自分の専攻分野と自分との関係」を知る

(2) アカデミック・コミュニケーション・スキルの向上

大学での学習活動を進めるうえで必要な、公の場での口頭発表能力を高める

4.2 授業の概要

4.2.1 受講生とスケジュール

受講生は2008年度3学期が9名、2009年度1学期が9名であった。2008年度3学期は学類留学生1年生が6名、2年生が1名、短期留学生が2名である。2009年度1学期は、学類留学生1年生が8名、短期留学生が1名である。理系、文系、芸術系など様々な専攻の学生が履修した。

1学期間のスケジュールは表1の通りである。

表1 スケジュール（2009年度1学期）

回	授 業 内 容	課 題
1	オリエンテーション 筑波大学にはどんな学群・学類があるのか？	課題① 自分の学類の専門分野
2	プレゼンテーションの方法	課題② 今とっている授業・これからとりたい授業
3	自分の学類にはどんな専門分野があるのか？ それぞれどういう関係があるのか？【課題①】	課題③ 専門用語リスト作成
4	今とっている授業は？これからとりたい授業は？ 【課題②】	課題④ 自分の専門の社会にとっての意味
5	専門用語をわかりやすく説明しよう【課題③】	
6	自分の専門は、社会にとってどんな意味があるのか？ 【課題④】	課題⑤：最終発表レジュメ
7	発表リハーサル	
8	最終発表	
9	フィードバック	
10	レポート提出	

まず、第1回ではオリエンテーションの後、筑波大学にある学群・学類を挙げるという活動を行った。学生は案外、自分の所属する学群・学類以外については知らないものである。そのため、この活動では大学全体の構成を俯瞰することによって、自分の専攻が全体の中でどこに位置しているのかを認識させることをねらいとした。

第2回ではプレゼンテーションの方法を説明した。

第3回から第6回は、課題に沿って進み、授業内で発表を行った。課題と発表の方法に

については後述する。

第7回は最終発表のリハーサルを行い、グループに分かれてリハーサルの様子を録画し、自分たちでふり返るという活動を行った。

第8回が最終発表、第9回がフィードバック（最終発表についてのディスカッション）で、最終週にレポート提出とした。

4.2.2 課題

本授業において、課題は教師に評価されるものではなく、授業内で発表する際の資料になる。発表において資料を有効に活用するために、課題は発表の前週に教師に提出し、教師のチェックを受け、それをもとに、他者を想定して再構成することを課した。

それぞれの課題のねらいは次のとおりである。

各課題のねらい

課題①：「自分の学類の専門分野」について知識を深める

課題②：「今とっている授業・これからとりたい授業」について考え、大学で学びたいことを明確にし、現在勉強していることと学びたいこととの関係を意識する

課題③：「専門用語リスト作成」によって、自分の専攻分野のキーワードを、いかにわかりやすく他分野の学生に伝えるかを考える

課題④：「自分の専門の社会にとっての意味」を考えることによって自分の専攻分野をより大きな視点で見る

課題⑤：「最終発表レジュメ」を、他分野の学生に分かりやすく伝えるための方法を考える

課題①、②、④は自己認識を深め、近々の将来、つまり具体的な1年後、2年後の自分の将来像を考えるための課題である。課題③は、難しいとされる専門用語を、他分野の学生に理解してもらうためにどうすればいいかを考えるための課題である。課題⑤は、最終発表でクラスメートに理解してもらうための資料作りである。

課題①、②、④はキャリアデザインの視点から自己認識を深め、将来設計を行うもの、課題③、⑤は他者を意識したアカデミック・コミュニケーション・スキル向上をねらいとしたものとなっている。ただし、2つのねらいはまったく別々ではなく、常に相互に関係を持たせるよう配慮した。

4.2.3 発表の方法

発表は毎回、ペアまたはグループ発表、全体発表の順に行った。この手順を踏んだのは、はじめに学生の発表に対する緊張感を取り除き、その後、全員に話し、聞く機会を与える

ためである。

また、発表は、記入した課題を見せながらの発表、ホワイトボードを使った発表、ポスター発表、パワーポイントを使った発表など、様々な形式で行った。これは、様々な発表形式を取り入れることによって、より実践的なアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上を図るためである。

発表の際はペアまたはグループ発表、全体発表のいずれにおいても他者を意識して取り組むよう指示した。

4.2.4 授業のサイクル

以下、授業のサイクルに沿って、活動の概要とねらいを述べる。本授業では、(1) 知る・広げる→(2) 話す・聞く/つながる→(3) 観察する→(4) ふり返るという4つのステップで活動を行った。図1は授業のサイクルを図式化したものである。

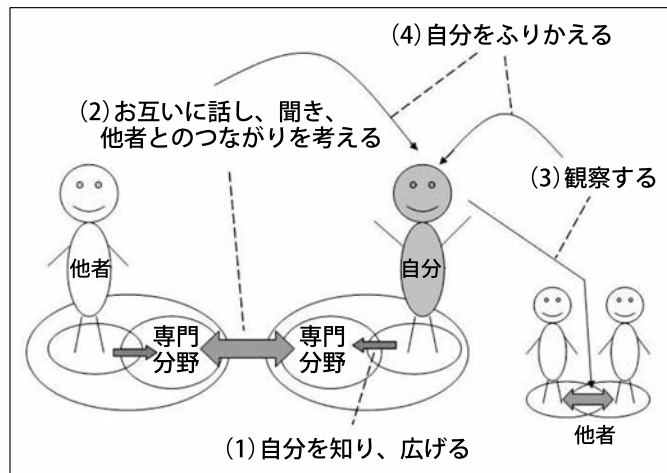


図1 授業活動

以下、それぞれの活動について具体例を挙げて説明する。

(1) 自分を知り、広げる

他者とのコミュニケーションの前に、まず、話す材料がなくてはならない。本授業では、毎回、自分の専攻分野に関連する項目について調べてくるという課題を出した。この課題は、キャリアデザインの考え方をもとに、入学したばかりでまだ自身や自分の専攻について漠然とした知識しか持たない学生に、自分の専攻分野や将来勉強したいことについて考えさせ、自己を認識し、拡大する機会を与えることをねらったものである。特に、4.2.2で挙げた課題①（「自分の学類の専門分野」について知識を深める）、課題②（「今とって

いる授業・これからとりたい授業」について考え、大学で学びたいことを明確にし、現在勉強していることと学びたいこととの関係を意識する)、課題④(「自分の専門の社会にとっての意味」を考えることによって自分の専攻分野をより大きな視点で見る)がこれに当たる。

大学入学から間もない時期に自己を知ること、近々の将来について考えることは、本授業内だけでなく、大学での学習・研究活動に対する知的好奇心を刺激することにもつながると考える。

(2) お互いに話し、聞き、自分と他者のつながりを考える

授業では、調べてきたことを発表する。発表は、ペア発表・グループ発表を行った後、全体発表をするという手順を踏んだ。ここでは、話すこと、質問に答えることによって自分の知識を整理させ、さらなる自己の認識と拡大を図った。また、他者と自己との関係を考えることで、他者の専攻分野との違い、共通点を認識する。このことは、学生自身だけでなくクラスメートの専門領域に対する知的欲求を高め、他者を鏡として自己の認識を深めることにつながると考えられる。

また、お互いに話し、聞くための手段としてのアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上のために、他者を意識したわかりやすい話し方の実践、発表を聞くときの聴衆としての態度の意識化を図った。特に、4.2.2で挙げた課題③(「専門用語リスト作成」によって、自分の専攻分野のキーワードを、いかにわかりやすく他分野の学生に伝えるかを考える)、課題⑤(「最終発表レジュメ」)などにおいて、アカデミック・コミュニケーション・スキルを重点的に扱った。

(3) 観察する

グループ発表後の全体発表では、発表者、聴衆、司会者の他に、「観察者」という役割を設けた。「観察者」は、発表とディスカッション全体を観察し、おもにアカデミック・コミュニケーション・スキルを中心に観察する。このように「観察者」を置く方法は「フィッシュボウル形式」と呼ばれ、学生自身が自らの議論における問題に気づき、課題化して解決を試みるようになることが指摘されている(森本2009)。

今回の授業では、観察者役の学生から、声の大きさ、視線などの発表態度、発表の材料(ポスターやスライドなど)の使い方、質疑応答時の発表者の対応、司会者と聴衆の参加態度など、様々な視点から具体的かつ建設的なコメントが出された。コメントには足りない点の指摘など否定的な評価だけでなく、「説明がとてもわかりやすかった」、「声が大きくみんなの顔を見ていてよかった」など肯定的な評価も多く含まれていた。このことから、観察者は、発表やディスカッションの内容部分と切り離されることによって、発表やディ

スカッションのいい点、改善点を客観的に分析することができたことがうかがえる。

このような気づきは、内容に深く関わる参加者の立場ではなかなか生まれにくい。学生は一步引いた立場の「観察者」を経験することによって、発表やディスカッションを大局的に観察、分析し、自分が発表者や聴衆として参加する際に活かすことができたのではないだろうか。そのことは、次の「(4) 自分をふり返る」からもうかがえる。

(4) 自分をふり返る

本授業では、授業の最後に毎回、今日の自分とクラスメートについてふり返る作業を行った。ふり返りの項目は、「今日の授業で発表者としてあなたはどうでしたか」、「今日の授業で聴衆としてあなたはどうでしたか」、「今日の授業でクラスメートはどうでしたか」、「次回の授業のためにしなければならないことは何ですか」、「意見・感想」、の5つである。

このふり返りの作業は、自己の気づき（自身に対する直接的な気づきだけでなく、他者を通じた気づきも含む）や、次回授業での自分の課題を明確化することをねらいとしている。これは、Plan（計画）→ Do（実行）→ See（評価）のサイクル（図2）を意識したものである。

実際に学生がどのようなふり返りをしていたかを見てみると、「事前準備が足りなかった」、「レジュメに書いたことを自分自身理解していなかった」、「（発表の時の）声が小さかった」、「話がどんどん長くなった」など、発表を通じて自分の足りなかったところに気づいたもの、「ゆっくり大きい声で話すように（したい）」、「私は質問をしませんでしたが、（次回からは）がんばりたいと思います」、「皆がききたいな一つていうようにしたいと思います」など、自己の課題を発見したもの、「（前は質疑応答の後『ありがとうございました』と言わなかったが）今回は『ありがとうございました』と言いました」、「がんばって発表しました」など、自己の課題を解決したことを述べるもの、「前の授業より（クラスメートの）声が大きかった」、「皆のポスターがきれいで驚きました」など、他の学生の様子や変化に気づいたもの、「みんな自分の専門についていろいろ知っていました。私しか自分の専門についてよくわからなくて恥ずかしかったです」、「発表するとき（他の学生のように）表などを使うことができなかった」など、他者の発表を見て、自分自身や自分の発表方法を省みているもの、などが見られた。

このことから、ふり返りの作業は、自己のいい点・改善すべき点の把握、次回に向けた

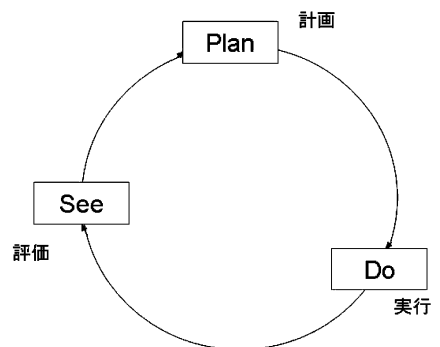


図2 Plan-Do-Seeの回転体
（鈴木2002）

自己の中での課題の設定は、授業活動がやりっぱなしになることを避け、失敗を次に生かすことにつながるといえる。また、このふり返りの蓄積はポートフォリオとして、自己の成長の記録にもなる。

以上、述べてきたように、本授業では、「学ぶこと」に対する学生の自己認識と拡大、他者を意識したアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上を図るために、課題、発表形式、活動それぞれにおいて、様々な工夫を行った。

(1)、(2)の活動は主に「学ぶこと」に対する自己の認識・拡大に、(3)、(4)の活動は主にアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上に重点を置いたものになっている。

ただし、お互いが独立したものとして別々に存在するのではなく、「学ぶこと」に対する自己の認識・拡大のためにアカデミック・コミュニケーション・スキルをツールとして活用すること、アカデミック・コミュニケーション・スキルの向上のために「学ぶこと」に対する自己の認識・拡大をリソースとして利用することを心がけた。このことによって、2つの目標が有機的に統合され、相乗的な効果が得られたのではないかと考える。

4.3 学生の反応

コース終了時に、本授業に関して学生にアンケートを行った。以下、アンケートの自由記述部分について分析し、本授業に対する学生の反応について述べる。

専門について発表するというと、専門用語を使い、聴衆にわかりにくい発表をしてしまう場合も少なくないが、大塚(2009)が指摘しているように、これからの専門人材は、専門知識を持たない人々にもわかりやすく話せる能力が求められる。本授業は幸いにもいろいろな専攻の学生が集まるという特性から、学生がお互いを理解するために、聴衆を意識する「わかりやすさ」が求められた。アンケートでは、「自分だけ分かるのではなくて、皆が分かるように 発表をするのが大事です」、「(この授業は)プレゼンテーションの時、緊張しないで、はっきりわかりやすくするような発表ができるために役立つ」などの記述があり、この授業を通して学習者は、発表やディスカッションの際に、他者への意識が高まったことがうかがえる。

また、学期当初、学生は自分の学類以外にどんな学類があるか、また、学類の中にどんな専門分野があり、それがどのように関連を持っているかさえ知らない状態であった。しかし、この授業を通じて自分の専攻分野について調べたり、他分野の学生と意見交換する中で、「自分の専門さえよく分かってなかったけど、この授業をきっかけとして分かるようになりました。他の人の専門についてもかなり分かった気がします」、「自分も他の人の専門を勉強したくなった」、「各々専門にはその専門ならではの社会にとっての 意味・機能がある」などのように、自分の専攻分野に対する理解が深まっただけでなく、他分野に

関する興味関心、専門分野の社会にとっての意味への意識が高まった様子がうかがえた。

以上のアンケート結果から、目標として設定した2つ（「学ぶこと」に対する自己の認識・拡大とアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上）に対して、学習者からも一定の評価が得られたと考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、キャリアデザインの視点を取り入れてアカデミック・コミュニケーション・スキルの向上をねらった学類1、2年生対象の日本語科目「日本語演習Ⅱ」について報告した。

本授業では、自己を認識し将来を考える「キャリアデザイン」の視点と、他者を意識した「アカデミック・コミュニケーション・スキル」を有機的に統合し、相互の向上を目指した活動を行った。

自己を認識する上で重要なのは他者の存在である。我々は、他者を鏡として初めて自己を深く知ることができる。一方で、他者を鏡とするためには、自己と他者の相互理解が前提として必要になり、相互理解を深めるためには、どのように伝えるか、どのように聞かかという他者への意識が欠かせない。本授業は、一見関係が薄いように見える「自分を知ること」と「他者を知ること」を、「キャリアデザイン」と「アカデミック・コミュニケーション・スキル」という観点でとらえ、その二つを有機的に結びつけた様々な試みを行った。

本授業を通して、学生は自分の専攻分野に対する理解を深めただけでなく、他分野への興味も持つようになり、自己認識を深めたこと、また、発表やディスカッションにおける他者への意識が高まったことが明らかになった。

ただ、個別のスキル面の拡充については課題が残った。今回は、学生が自己認識を深めたり、将来について考えたりすることや、他者に意識を向けることに主眼を置き、「自ら気づくこと」を重視したため、レジュメの書き方、発表の表現、発音、文法などに関して教師から細かいフィードバックを行うことは最小限にとどめた。この点について、学生から「日本語の表現をしっかりとった」という意見があったこともあり、「日本語の授業」という位置づけから、スキルの教授やフィードバックの方法などで教師がどのように関わっていくべきかを考える必要がある。また、教師の指導に頼らず、自身で、あるいは、クラスメートとの相互交渉を通じて、気づきをうながすにはどうしたらよいかについても模索していきたい。

参考文献

大塚裕子（2009）「科学技術コミュニケーションのための自律型対話の研究と社会的実装」
『「自律型対話プログラムによる科学技術リテラシーの育成」研究成果シンポジウム対

話ノススメ資料集』1-2

河崎智恵 (2001) 「米国中等学校家庭科におけるキャリア教育の授業実践」『進路指導研究』20(2):21-30、日本キャリア教育学会

金原奈穂・春原憲一郎 (2007) 「外国人留学生の日本企業就職に向けたキャリア・デザインの理論と実態」『2007年度日本語教育学会秋季大会予稿集』107-112、日本語教育学会

熊波由佳 (1997) 「口頭発表の考察と指導」『日本語学』16(8):12-22、明治書院

倉八順子 (1995) 「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす影響」『日本語教育』89:39-51、日本語教育学会

国立教育政策研究所生徒指導研究センター (2002) 『児童生徒の職業観・勤労観をはぐくむ教育の推進について(調査研究報告書)』、国立教育政策研究所生徒指導研究センター

鈴木克明 (2002) 『教材設計マニュアル』北大路書房

堀井恵子 (2006) 「留学生初年次(日本語)教育をデザインする」門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミックジャパニーズの挑戦』67-78、ひつじ書房

村岡貴子 (2008) 「専門日本語教育における語彙指導の課題—アカデミック・ライティングの例を中心に—」『日本語学』27(10):60-69、明治書院

森本郁代 (2009) 「自律型対話プログラムの概要」『「自律型対話プログラムによる科学技術リテラシーの育成」研究成果シンポジウム対話ノススメ資料集』3-6

柳田直美 (2009) 「アカデミックコミュニケーションスキル学習の場としての「討論会」—ブレ討論会が実際の討論会に与えた影響」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16:57-74、横浜国立大学留学生センター